

すみだタウンミーティング 議事録

テーマ	“つながる場”づくり～コミュニティプレイスの実践を通して～
日時	令和元年9月28日（土）午後2時～4時20分
会場	墨田区役所12階 121会議室
参加者	31名

<内 容>

【第1部】事例紹介

すみまめカフェ 渡邊宗貴氏

すみまめカフェは法人経営で、運営母体は株式会社クリエイト・ケア。自身はその代表取締役をしている。場所はキラキラ橋商店街の中にあり、その理事も務めている。地域密着型の商店街の中で地域密着型の介護サービスを行っているので、地域につながることは双方にメリットがある。仕事としては地域密着型のものなので、つながりがないと商売にならない。ただのたまり場ではなく、共通の趣味、価値観、目的を持った人が集いの場としてすみまめカフェを利用してほしいという想いでやっている。

ゼロからイチをつくるのが好き。認知症カフェは民間開催のものがなかったので、先月から毎月第2日曜日に行くことにした。商店街とカフェとプラスなにかということコンセプトにしていて、介護、若者、コミュニティなどといったもので、ドッグカフェやワークショップなどを行っている。

仕事の関係上高齢者はもちろんだが、子ども向けにもできないかということで、最近では、低価格でできる英会話教室を行っている。千葉大学の学生とコラボをして、8月にはイベントを実施した。音楽では曳舟エリアで2回目となる「すみだストリートジャズフェスティバル in 曳舟」に協力をしている。また、すみまめカフェでも3か月に1回の実施の予定で、毎回10組程度が演奏する機会を設けている。ありがたいことに台湾からのインバウンドも多く、400人弱の人が視察に来ていて、商店街で買い物をしてもらっている。台湾ではすみまめカフェのことは知らない人はいないということも言われている。商店街のスペースをどのように活用するのかを日々考えている。

将来的には、商店街×カフェ×〇〇によって、商店街を元気に、人にやさしい商店街にしたいというのが目標。

halahelu 灰谷歩氏

京島三丁目でシェアカフェをやっている。halahelu は空き家だった古い家を1年1か月ほどかけて改修して作った。商店街の陶器屋さんが取り壊すということで、古い窓を譲ってもらってつけたり、コンクリートをはつったりするのは自分でやった。友だちにも手伝ってもらい、壁や天井を塗った。地域の陶芸家さんにタイルを焼いてもらい、キッチンに使っている。このように自ら取り組むことで、自身の愛着をはぐくんでいった。このような愛着によって、モチベーションを維持し続けられる。また、みんなに手伝ってもらうので、みんなにも愛着のあるものになると思っている。

シェアカフェなので、異なった雰囲気のカフェになったりもする。けん玉も扱っているので、近所の子どもたちはもちろん、外国からお客さんが来る。2018年の世界チャンピオンが遊びに

来たりしている。外国の人が来ることで、子どもたちの中に英語が話したいという人が出てきている。また、外国人も日本語を学びに来てくれる。はじめてけん玉をやる人に教えたりもしている。

お店ができたときには、近所のおばあちゃんたちが自分が来るのを待っていてくれて、歓迎をしてくれた。けん玉をやっていると、メディアからも注目されやすい。ロンドンから演劇をやっている友人が遊びに来て、演劇をやったり、旭川から音楽家が来てライブをするなど、自分が好きなことに取り組むことで、結果として地域がつながるきっかけづくりになっている。

自分としては好きなことをひたすらやっているだけ。それが自分のモチベーションを維持できる理由になる。続けることが大切だと思っていて、自分の好きなことを通して、好きな人とつなげる。なぜ人に紹介したいとか来てほしいのかと考えると、自分にとって京島が魅力的なまちだから。このコミュニティを他の人たちにも見てもらいたい、すでに土壌はできているので、それを良いように継続していきたい。

懸念している点が1つあって、コミュニティは古い路地や家が形成していると思っているが、最近建売がどんどん増えていて、カラーが一色になっていっている気がする。京島地域は路地の狭さが人と人の距離感を近づけている。外部の人でもそれを好きだと言ってくれて、繰り返し遊びに来てくれる。この色が京島のカラーだと思うので、カラーをどのように今後活かしていくのか、一緒に考えていけたらうれしいと思っている。

喫酒千日紅 多田翔氏

店の内容は配布資料を見ていただきたい。来月で運営3年になる。地域で何をしているか話したい。お店はお酒を主に販売している。そのため、お酒を飲めない人、お子さんは来れないところになる。そのため、商店街のイベントを通して、子どもたちと関わるような取り組みをしている。

お店以外の活動が主で、錦糸町で10回目を迎えたすみだストリートジャズフェスティバルがあるが、それを商店街でも昨年からやっていて、実行委員会の運営委員長を務めていた。地域で抱えている問題を根本的に解決するために子どもたちに何かできないかということを考えている。

自身は生まれも育ちも墨田区。いろいろな人に支えられ、時には怒られたりもして育ってきた。商店街のおひざ元に小学校があり、私はそこの出身。そこのPTAの人たちと一緒に地域で子どもを育てることができないかということで、盆踊りや地区プールを手伝っている。共働きが当たり前で、自身も子どもの頃はかぎっ子で商店街の人にお世話になっていた。今は親孝行という気持ちでお手伝いをさせてもらっている。今日は子どもたちに何ができるかというのを中心に考えていけたらと思っている。

ゲストハウス墨田長屋 岩本友理氏

墨田長屋は築約60年の長屋の一角を改修して、8名宿泊の小さなゲストハウスを運営している。1階にはtorinosが入っていて、カフェと共有スペースになっている。ベッドが6床と和室2室。

ゲストには安心感のある心地よい場所になるように心がけている。長期のお客さんとは時々夕飯を一緒に食べたり、特徴のあるところを紹介したり、地元を知ってもらおうようにしている。爬虫類館分館（墨田区京島にあるシェアカフェ）で毎年金曜にお店を出していて、それがきっかけで近所の人と知り合いゲストハウスを始めるきっかけになった。今では個人でケータリングもやっている。

ゲストハウスなので、この場所は色を持たない場所として、営業時間外では限られた時間で音楽ライブや地元の方とのトークイベントなどをやっている。近所の大川硝子が産学協働でやっている事業のトークイベント会場として使ってもらった。大川硝子の展示販売もやっている。

torinos 末弘麻里子氏

墨田長屋の1階で焼き菓子店を営業している。torinos では季節の果物を使った焼き菓子を中心に販売している。イトインも可能になっている。

通常営業以外の活動としては、墨田区内外のイベントへの出展、店内での企画のイベントで地域とのつながりをもっている。店内での企画では、アロマの講師を招いてワークショップをデザート付きでやったり、コーヒー屋さんを招いてコーヒーをいれてもらったりしている。区内のイベントでは、モノコト市、やっちゃば、すみゆめの企画にも出店している。区外では墨田区のほかの事業者と共同で吾孃ストアとして出店し、埼玉県川口の senkiya というカフェで自分たちのカフェの特徴を伝えるイベントをやっている。このような活動を通して地域とのつながりをつくっていきたいと考えている。

喫茶ランドリー 大西正紀氏

株式会社グランドレベルとして、自社で喫茶店にランドリーがついているお店を運営している。墨田区の南の方にあり、中に洗濯機、乾燥機、ミシン、アイロンなどがあり、まちな家事室のある喫茶店。周りは倉庫などが多いが、この20年でマンションに建て替わっている。人口は増えているが、まちには人が歩いていないという印象の地域。お店は築55年の3階建ての建物の1階にある。100㎡ほどだが、4つのエリアを作っている。フロア席は喫茶スペース、家事室、半地下のモグラ席というのを作っている。

もともと建築の設計や編集、デザインをやっていたので、ハードのデザインも大切にしつつ、ソフトでメニューや接客も大事だが、何を許すかという点も含めて大切にしている。ハードとソフトを取り持つコミュニケーションを大切にして、スタッフをコントロールするようにしている。コンセプトは、あまねく人々、どんな人にも自由なくつろぎ。0歳から100歳まで気軽に立ち寄れる場所をつくらうということで努力している。社会的弱者の方々というのが注目されがちだが、ランドリーオープン前にまちの人たちと話をする中で、幸せそうだと感じる人でも言葉にできない悩みをかかえているという人がいるとわかって、このようなコンセプトにした。

特徴的なのは、喫茶ランドリーとしては一切イベントはしないということ。誰かが何かやりたいと言ってきたら、それを全力で応援するというようにした。おかげさまで開店して半年ほどで約100件のイベントに利用していただき、1年8か月が経ってもそのようなスタンスで続けている。

よくコミュニティという言葉を使うが、一般の人は仲間と普段楽しく話をしたりしていても「これがコミュニティだ」とは思わない。日常が淡々と流れていて、その中で人と話したり、であったりして幸福を感じながら淡々と生きていくというのをどう実現させていくのかというのを意識しながら運営している。これを他の地域でも事業化しようと取り組んでいる。

二階の食堂 kanegafuchi 荘司美幸氏

鐘ヶ淵という墨田区の最北端で食堂をやっている。コンセプトは出汁を丁寧にひいた食事を出す

ということ。前は吾妻橋にあって2015年5月に今の場所、鐘ヶ淵に移った。場づくりとしてはいろいろなワークショップをやった。ヤンニョムや、お花見弁当、めんつゆなどいろいろなものをつくるワークショップ。食を中心にワイワイやるのが楽しいよねということでやっている。

一方、自身は子育て支援の活動もやっており、同じような飲食店が集まってすみだ食堂飲食店の会というのを運営している。2013年の子どもの貧困対策法が成立したが、これについて私たちができることは何かということで、1年ほど話し合いをしてきた。2019年4月には全国で3718か所の子ども食堂がある。話し合いをしてきた中で、子どもの貧困を救うという視点では根本が解決しないのではということがわかった。また、子どもの貧困は家庭の貧困ではない。貧困層の一手手前の普通の生活をしていて、ご飯を出しているが、疲れている層の方がずっと多いということがわかった。そこで、食を通じて地域が支えあう仕組みの活動ということですみだ食堂をやっている。

すみだ食堂というのは子どもたちに食事を提供する加盟店という位置づけで、二階の食堂もその一つ。また、ボランティアとして手伝いたいという人や、食材、お金の寄付をしてくれる支援者がいる。ただ、私たちだけではできることは限られるので、みんなで地域を見守る手、目、口となり動いていくことで、現状を変えていくことができるというのをすみだ食堂から発信している。なので、地域住民の人たちにすみだ食堂に来てもらって、来てもらった人たちにそのような目で見てもらうようにしてもらおう。そうすれば、声をかけてもらえるようになるかもしれない。

新たな取り組みとしては、すみだ食堂は毎月飲食店が可能な範囲で運営しているが、毎日すみだ食堂というのをやっていきたい。例えば塾に行く子どもが家に帰って食べる時間がないので、お金を渡している家庭がある。親としては子どものために良いものを食べてもらいたいという思いがある。そこで、すみだ食堂に入っているところであれば、子どもが一人で来ても食べられるようにということをやりたいと思っている。子供だけじゃない食を中心とした地域の課題、赤ちゃんからシニアまで楽しめる場にしていきたいと考えている。

質疑応答

山本区長

それぞれの話を聞いて感激した。このような方々に墨田区は支えられていて、感謝をしないとイケないと思った。最北部から最南部まで広いエリアで取り組んでいただいている。それから京島八広エリアでは、皆さんがまちを好きになって、その思いで取り組んでいただいているというのがうれしかった。

大川硝子の話が出ていたが、大川硝子は墨田区の100年企業で、4代にわたって営業をしている歴史ある会社である。そのようなところと墨田長屋が連携をしているというのは初めて知った。また外国人がまちに入ってきていて、その方々へのおもてなしをしていただいているのだということもわかった。halaheluに行ったらけん玉をしている外国人ばかりで驚いたのを覚えている。認知症カフェ第一号との話もあった。それぞれが自分たちの特色を生かして、本当にさまざまな取り組みが行われている。大学との連携とか、音楽都市への協力とか。自分のところではイベントはやらずに貸し出しているところもあった。それから子どもの支援。これからの子どもたちにどう接していくかというのもキーワードだった。また、吾嬭ストアでは墨田区の人を集めて取り組みをするだ

けでなく、川口市へ行ってPRもしていただいてもいる。改めてすごいなと思った。

一方で、継続は力なりということで取り組む中で、かなり苦勞もあるのではないかと。好きなことだから楽しいというのはあるだろうが、苦勞する点もあるのではないかと。また、古くからいる地域の人たちは応援団でもあるが、一方で受け入れてもらえないような苦勞もあるのではないかと。100%地域で信頼されているという人もいるとは思いますが、そのような点はどうか聞きたい。

渡邊氏

商店街イベントには積極的に参加している。店舗の中のイベントについて、掲載している写真では写真の撮り方を工夫しているので集まっているように見えるが、人集めが難しい。SNSや知人を通してなどで協力をしてもらってはいるが、難しい。イベントは1回だけで終わるとそれまでの、最初は少なくとも継続するというのが大切だと考えている。一度始めたら認知が広がるまで頑張るというスタンスで取り組んでいる。

灰谷氏

続けていく苦勞はほぼない。好きなことしかやっていないので、それでストレスはためたくないという想いがあり、大変だとは考えないようにしている。好きなことをやり続けることが良い結果につながるだろうと考えて取り組んでいる。

地域の人たちは100%自分の取り組みに対して好意的かということ、そうではない。いろいろな人がいる。大多数の人は喜んでくれるが、一部の人は快く思わない。具体的にはけん玉を路上でやることに快く思わない人はいるので、どうしたら良いかと思うことはある。どちらが正しいと決めるのではなく、お互いに歩み寄って折り合いをつけることになるかと思うが、あえて言うのであれば、そこが苦勞している点。そこはゆっくり、どうしたら理解し得あえるか考えていきたい。まずは自分が相手を理解することからスタートしていきたいと考えている。

多田氏

収入という面でいうと、自分は貧困という扱いになると思う。しかし、自分は趣味で生きているので、物が少ない、お金が少ないことにストレスを感じない。楽しいことをやっていることで幸せを感じている。地域との関わりとしては、地元で育っているので良くしてくれていると感じている。

ただ、ちょっと近すぎないか感じる時もある。その辺はうまい距離感を見つけていければと思っている。昔はそれで成り立っていたのだと思う。そのような点は、自分も好きだが、外から来る人たちがどう感じるかはまた別の話になる。そのようなもともと地域で暮らしている人と外から来た人たちとの熱量の違いについては懸念がある。どうすり合わせていくかは自分としての課題。

岩本氏

ゲストハウスという性質上、外国の人などが多いので、東京や墨田区、まちを知らない人がくることを前提にしている。来てくれた人と心を通わせることを重視している。コミュニケーションを密にとって、お客さんに近所のお店を紹介しながら、近所の人とコミュニケーションをとってご理解を得ながらやっていこうと思って続けている。

未弘氏

コミュニティの中で苦労しているというほどではないが、家が両国で墨田区の南部。お店は八広で北部。両国の人は八広にはあまり来ないのであまり知っていただけない。墨田区外の人も墨田区では押上やスカイツリーは行くが、それ以外の地域は知らないという人も多く、実際に足を運んでもらいにくいという点で苦労はしている。

大西氏

大きな悩みではないが、商店街ではなく、住宅街にあるので、まだまだ地域の人に認知されていなという点はある。未だにお店の前を自転車でぐるっと回って帰っていくという人がいる。そういう人にはコミュニケーションを心がけて、洗濯ものがなくてもお店でゆっくりできる場所だと伝えている。

場所を自由に使ってもらう中で、どうしてもやりすぎてしまうこともある。たまに警察に通報されたりもしているが、それは喫茶ランドリー側が責任をとるということでやっている。実際に利用者がやりすぎて警察が来ることで、我々もここまでやるとだめというラインを認識できるので、それもよしとして以降は気をつけている。

荘司氏

今回話をしたのはすみだ食堂というボランティアの話になる。二階の食堂という食堂についてであれば、売り上げについての悩みはある。しかし、すみだ食堂の活動はボランティアで、その点では悩みはない。もっとこうしたら良いのという想いはあるが、そうすると、人、モノ、金が必要になる。そこは悩みといえば、悩みではあるが、焦らず少しずつ進めていきたい。そうはいつでも、子どもの貧困は6人に1人。それを考えると、悠長に構えてはいけないとも思う。また、貧困と虐待は切っても切り離せない。そこに対しても私たちとしては取り組んでいきたい。そのようにやるべきこと、やりたいことという点で考えていくと、悠長にしていられないので焦っているともいえる。

【第2部】グループワーク

テーマ1 「自分の理想の“つながる場”」

C グループ

墨田区立花では600世帯あり、うち70歳以上の人が300人で高齢者が多く孤独死も多いが、近所の集まりではそういった話が出ない。孤独死はその人が気軽に入れるコミュニティがないから生まれると思う。また、コミュニティがあってもどうして良いかわからない、入りづらい高齢者が多いのだと思う。地域ぐるみの介護、集まりやすいコミュニティが理想。

新宿のゴールデン街のように間借りで取り組むところは多い。SNSで拡散ができるので場所を選ばないで人を呼び込む方法もある。裏道を使ったりあえて地域と外部をつなぐ場所でコミュニティをつくるというのも理想。

複数のコミュニティを行き来して、いろいろなコミュニティに参加したいという人もいた。

子どもがいる方は、子どもの手を放して近所の大人が子どもを見てくれて、ご飯が出てくる、集まれる場所、高齢者が見てくれる場所があると良いということだった。

地元で育ったり、外から来た人がすでにあるコミュニティには入りにくい。入りやすいコミュニティがあると良い。

D グループ

それぞれが取り組んでいるコミュニティ活動について話をした。毎週水曜に薬局が主催で外出をしたり、そこの中で折り紙教室をやっている。その中にはしがらみがなかったり、薬局のものを買わなくてよく、縛りがないようなものが理想だということだった。その中で外に行くことが増えて、それが楽しみで来る人が増えたり、その中でしばらく来ない人が出たりすると、それが安否確認になったりする。しばらく来ないゆるさが重要ではないかという話になった。

E グループ

まちには多様な人がいる。地域に長く暮らす人、学生、新しく来た単身者。それぞれがいろいろな役割を持っているが、お互いを知る機会がないので、疑わしい目で見ることがあるので、それを解決したい。町会ではいろいろな活動しているが、横の連携がないので、お互いが何をしているかを知る場がない。そのような場、方法があればお互いに知ることができ、よりよい環境になるのではないか。

区外からの参加者からの視点で、外国から来た人が墨田区の良さをもっと自然な形で知ることができる方法がないか。音楽イベントを主催している人からは墨田区の川沿いで音楽イベントを自由に開催できれば、普通に生活していると関わりのない人と話をする機会が全然ないので、そのような環境を増やして気軽にお話しできる機会を提供できればという話が出た。何かを売る、買うではなく、人とどう出会えるかという場を作りましょうという意見があった。

F グループ

理想のつながる場について意見を出してもらった。無理をしすぎない。ゆるやかさがある。自分が成長できるなど。

共通して言っていたのは、多世代、いろいろな世代と関われる場が良い。継続、持続可能なコミュニティというのがグループのテーマになっている。持続可能なコミュニティをつくるにはということ話をしていた。参加するのに敷居が低いと良い。もともとコミュニティには、敷居が低い方が良いということがあり、実施する側としてどうすれば敷居が低くなるかというのは考えさせられた。

A グループ

住んでいた地域環境、今住んでいる環境で意見は異なっていた。子どもから高齢者までいろいろな選択肢がある、自由度が高いということが共通の意見。学生など外からの人とコラボができるのが理想。町会やイベントを結び付け、コミュニケーションを図りたいという意見もあった。

また、地域ぐるみで子育て支援をおこない、育った子どもが「自分たちが育てた子どもだ」と言えるような地域だと良いという話が出た。

B グループ

敷居が低いコミュニティ。0歳から100歳まで誰もが入れるコミュニティ。持続できるというのがキーワードだった。

この場も一つのコミュニティになっている。次にやるときに今いる人たちがいないと残念。それを続けるためにはどうするかはこれから話をしていけないといけない。趣味、年代が一緒というのは自然発生的にたくさん出てくるが、局所的。0歳から100歳だと敷居が高くなるので、そのためにはどうするのか。墨田区という大きなコミュニティの中で小さいコミュニティ同士をどうつなげていくか、そして、それがつながった先というのが理想ではないかという話が出た。

山本区長

自身としては、入りやすいつながる場であって、入る際には悩みがあったり、暗かったりするが、たとえばすみだ食堂に入って、いろいろな話をして、食事をして、出ていく時に笑顔で出てくるような場所だと良いなという話をした。

それぞれ理想があるのだと話を聞いて思った。つながる場所づくりという意味で、これからもみんな考えて、課題というか、みなさんが求められているものをうまく形にすることは難しいかもしれないが、モデルのようなものができると良いのではないか。まずはトライアンドエラーということで、みんなで取り組んでみるというのが大切ではないかと思った。

テーマ2 「“つながる場” づくりにおける課題・困難なこと」

E グループ

人間関係なので、好き嫌いが起きてしまうと場づくりができない。人間関係をどう整えるかを着目する必要があるという意見が出た。できるだけいろいろな人と交流を持ちながら、コミュニティの楽しい活動が周りにも伝わるようにしていけないといけない。人集めという点でみなさん課題ではあると思うが、ハードルを上げずに、小さくても成功だと言えるように背丈を低くすることが大切だという話だった。

訪日外国人の話も出て、せっかく墨田区に来て宿泊しても翌日富士山にという人もいて、すみだを見て知ってもらうことにはつながっていないこともあるので、コミュニケーションを取りながら解決できればという話が出た。

F グループ

今自身の町会で困っていることが、4年間でお祭りの寄付金が100万円減っている。1年間で25万円減っている。このままだとお祭りができなくなってしまう。どうしようかという話になり、自力で稼ぐ町会になるか（寄付に頼らない）。経費を減らす。のどちらかになる。そこで、模擬店を実施して売り上げをあげて、黒字化は達成したが、寄付の減少による先細りは変わらない。結局コミュニティを続けるにはお金が大事になってくる。人が集まったとしても寄付が持続可能にはならないので、どうしたら良いかという問題を抱えている。

A グループ

情報をほしい人、ほしくない人にどこまで伝えれば良いのかという線引きが難しい。セキュリティ、個人情報の問題があるので、そこが難しい。場所、人、お金の問題で継続が難しい。町会についても高齢化していて、若い人がいない。勤め人の人たちが参加しないので、そのあたりのコミュニティが難しいという話が出ていた。

B グループ

場所をつくろうという経験談の下、こういうことをしたら人が集まるのではないかというのは大切。しかし、ハード面での場所やお金が大切。お金ないのでどうしようというのが実際。場所については、築年数が古い建物があるので、有効利用をしようとしても、防災の面から活用ができないという問題がある。0歳から100歳まで誰もが笑顔になれる場所というものはあるが、年代によって悩みは異なる。若い人であれば体は動くが、お金がない。子育て世代は子どもを見てもらわないと体があかない。高齢者であれば体はあいているが、力仕事等は難しいというところがある。それらを解決していく必要があるという話だった。

C グループ

場づくりをするには、運営、経済的な部分。公的機関に支援してもらうことなどがある。仲間づくりが難しい。場所はあっても高齢者がそこに入っていきっかけをつくるのが難しい。継続するのが難しい。民間で動くときにコーディネートできる人がいない。課題と思うことは、エキスパートな人や支援する人や機関もあるが、ほしい情報が届かない。情報を得たいがどうしたら良いのかわからないという点が挙がっていた。

D グループ

キーワードとしては、情報をどう拡散するかということだった。ボランティアをしている人は毎回同じ人からしか依頼が来ない。このような活動をしているという情報をどう発信していくか。SNSでの発信がうまくいかないというような課題がある。墨田区の中でも北と南で温度差がある。北と南でも行き来が難しいので、遮断されてしまう。つながりを密にするのが難しい。それを密にできれば墨田区全体の場づくりももっと密になるのではないか。区長も、マップを区で作成しているが、区民に伝わっていないので、もっと活用してもらえるように努力していく必要があると言っていた。

山本区長

みなさんの困っている部分を聞いて、どう政策に落とし込むかのキモの部分を知ることができた。お金の問題が出ていたが、スポンサー、民間の支援などの工夫。公的なものも公平、公正、適切に使ってもらうというのにも用意をしておくのはいけない。区としてはお祭りにお金を出すのは難しいが、困っている事情をどう解決していくかというのは同じ悩みかと思う。

それから人集め、情報の伝達、到達手段、発信の仕方。広がりがあるかないかというのは、ポイントポイントで皆さんも頑張っているが、どう広げていくかは課題。それが広がることで墨田区が良いところだと感じてもらえるようになるのではないかと思った。

継続性、南北のアクセスの話もあった。私たちも課題として認識し、みなさんから具体的な話を

聞いて今後に生かしていかないといけないと思った。

テーマ3 「地域活動を始める・続けるために必要なこと」

D グループ

SUKISUMI という墨田区の情報書き込みページがあるという話が出たが、私は知らなかった。それをもっと系統的に簡単に書き込みできたら良いのではないかという話があった。情報を詳しく書き込んだ上で申請を出して、審査があってから掲載されるということで、タイムラグがある。情報としての新鮮さがなくなったり、イベントの告知をしたくても間に合わなかったりということがあるのではないかということだった。また、何をするにあたって、窓口を分かりやすくしたら良いのではということだった。

E グループ

地域の活動をはじめるといことについては、そのまちで何かをはじめようと思ってもらえるまちでないといけないということからスタートした。ある人が住み始めて、このまちに長く住んでいこう、好きになったので、ここでチャレンジしてみようと思わせられるような意識を持ると良いということだった。続けていく上では運営のお金の話になっていくと思う。地域に貢献することはお金に換算できない部分だが、指標を設けて、地域貢献の援助が実現できればより価値のあるものが長く続くのではないかと。

企画書を行政に出すときに、申請書の書き方が難しい。自分の考えていることを伝えにくいフォーマットになっているので、何かをやりたいと思ったときに、行政側へ楽しく、やりたいと思っていることが分かりやすく書けるようにできるといいねという意見もあった。

F グループ

地域活動を続けるために必要なこととしては、お金。行政への提案という点では、お金のないコミュニティでは行政にサポートしてもらうためにどう伝えたら良いのか。窓口がはっきりしないというのが一つ。

行政の人たちも地域を良くしたいという想いで働いている。私たちも地域が良くなれば良いという目的を持っていて、根本の目的は共通のはずだがずれてしまっている。行政側の課題としては窓口での対応だったり、我々やる側にしても、「これだけ良いことをやっているからお金を出せ」というスタンスではマッチしない。お互いに学びあい、成長しあわないといけない。それがずれているとうまくいかない。

すみだ食堂では現状お金には困っていない。飲食店を営んでいるから。しかし、いろいろな人に入ってもらいたい、伝えてもらいたいとなるとお金が必要になってくる。そういったときに、子どもの未来応援基金という助成金をもらっている。今後実績ができたときに行政がどうするかというのがまたポイントになると思う。一つ一つ段階を踏んでやっていくことが行政と進めていく上で必要だと思っている。

A グループ

地域活動を新たに始めるということは、人、モノ、金、パワーが必要になる。新たに地域活動をつくるのではなく、足元の地域コミュニティに参加して、それを継続させるという案が出た。足元の小さなコミュニティから広いコミュニティに移動するために、南北の移動が大変との意見もあったので、電動自転車の補助金などを与えて移動を可能にしてはということだった。現在あるコミュニティをうまく利用していくのがパワーのいらぬ方法。ただ、その財源を利用するための周知、宣伝するには区の広報支援が必要。自分たちで広告をうつのはお金がかかる。区が情報発信の支援をしてくれると、小さなコミュニティが広がるのではという意見が出た。

B グループ

何かをするにあたって、お金は切っても切れないもので、それが障壁になるという事実がある。しかし、区に助成してもらいにしても、イベントによってどこの課なのか。二つ以上の課があると言っていることが違うということがある。担当の課で考えている目的が異なるということもあつたりすると思う。どこに言えば何をしてもらえるのかということがわかりにくいのが現状。また複数あると個では対応がしにくいので、そこを明確にしていだければと思う。

他の区ではなんでもやる課のようなものがあるが、結構難しいところがある。自身も東京都の職員だったことがあるが、公務員の限界を感じた。やりたいことと、ルールを当てはめたときに動きづらい。動きやすいのが民間、動きづらいのが行政。この二つをうまくかみ合わせると大きなことができると思っている。やりたいことをどこに伝えたら良いのかというハブ的な組織があると良いという話が出た。

C グループ

情報、お金などのキーワードが出た。自分としてはお金をほとんどかけずに自分ひとりでできるところからスタートした。誰かの力を借りなくても最低限続けられるということをやっている。このようなやり方も一つあると思う。

大きな課題になってくると、自分ひとりではなく、周りも巻き込んだものが必要になると思う。その際に情報を得ることがとても重要。知った上で自分が使える情報が見つかるか、どうすれば手に入るかが問題。話の中で出てきたのは、墨田区の広報を読めばわかるので、そのうえで動くというのも一つの方法。一方で、私たちはほとんどが広報に目を通さない。その際には SNS のメッセージでやりとりをするというのも一つの手段。区長の動きがタイムラインで流れてくるというのものもあるかもしれない。

結局、お互い興味がないと動かない。いろいろな世代、多種多様な人がいるので難しいが、関心が薄いところにどうしたら関心を持ってもらえるか。個人的な話になるが、電動のキックボードは違法だが墨田区では OK としたら、自分だったら区長にかなり親近感を覚える。このようなのも一つの方法。なるべく多くの人に興味を持った時に知ることができるツールが必要。お互い努力が必要。待っていてはいけない。しかけないといけない。やっている人は多いので、それをどうつなげるかだと思う。

すみだがそういうまちだというのをみんなで作っていこうというのはとても良いこと。冒頭にみなさんの取り組みを聞いて、すばらしいと思った。みんなの力を合わせてすみだは面白い、何かできるまちだという土壌を区役所と皆さんと一緒に作っていかないといけないと感じている。共通して言えるのは、区役所の窓口の対応というのはあった。地域力支援部という名称がある組織は他にはなかなかない。私の想いとして地域力をみんなでつくっていこうという想いで作っている部署なので、第一義的な窓口という話があったが、ここが窓口だととらえていただければと思う。その中で、地域の貢献へのポイント制度、申請のフォーマットの工夫など、区がサポートしていく手段、方法について分かりやすくしてほしいという意見はしっかりと受け止めたい。お金の面、周知宣伝の両面にわたって、しっかりとメニューを整えるという作業を広報の部署や、産業振興の部署等も含めて総合的なメニュー作りが必要と感じた。

公的な支援は難しい。すみだストリートジャズフェスティバルというのは、公的支援は1円も入っていない。それでもあれだけのことができるコミュニティもある。東京都もあるが、3年限定で新しく生まれるコミュニティに対して、一緒にやりましょうということで、支援することはある。しかし、4年後からは自立をお願いしますということになる。ここが難しいところで、出だしを間違えると良くないのだが、4年後から自立をお願いしますという行政の立場と、4年目から金の切れ目は縁の切れ目になってはいけないという部分があるので、ここの部分をケアする制度の工夫は必要。東京都の補助も例えば保育園の補助も3年が終わると区の負担になったりと公的支援の制度的な限界もあるので、しっかりと制度の説明をすることも必要と感じている。

南北の移動のための電動自転車というのは一つの面白い支援の方法。キックボードもそう。アイデアに満ちた私たちへの注文というのはいただきたいと思っている。私の入ったCグループでありがたいと思ったのが、墨田区の広報を全部見るといろいろなやりたいことが出てくるという意見が出た。自分がコミュニティを作りたいといったときに、実際に足を運んでみる、アイデアを出し続ける、アンテナを高くしてファンを獲得していくといった想いを聞いて、徐々にそのようなまちになってきて、みなさんに参画いただけるようになってきている。そのようなまちをつくっていこうという叱咤激励を受けられる場になって、良い2時間だったと思っている。

私自身は人間としての敷居は低い方なので、いろいろな場に呼んでいただき、私としても足を運びたい。こんなコミュニティをやっていると実地で視察をさせていただき、墨田をもっと良いまちにしていくところにつなげていきたい。これで終わりではなく、継続してやっていますということも今後も教えてもらいたい。今後ともよろしくお願い申し上げます。

以上